

自動販売機あれこれ

近代以後の社会は、広大で開放的な分業社会であり、前近代社会に比して、接触範囲の拡大したことが、特徴の一つとしてあげられている。社会が無限に分化し拡大し、接触範囲が広がると、接触の性質は間接化し、コミュニケーションもパーソナル(親密)なものからインパーソナル(形式的)なものに変化しないわけにはいかない。

インパーソナルな接触の一例として売買関係があげられる。人間は、生活に必要な品物の売買のため、これまでに多くの他人と接触してきた。

ところが、最近ではインパーソナルな関係さえ通り越し、人間との接触なしに品物が買える例がでてきた。近年になって急速に普及してきた自動販売機がそれである。国語辞典に、「お金を入れるとひとりで品物が出てくる機械」と解説されているこの機械で、現在は、たばこから乾電池、おみくじまでいろいろなものが買える時代となった。

日本自動販売機工業会の発表によると、昭和52年末現在で、自動販売機は、国民33人に1台の割合で普及し、1人当たり年間17,350円の買い物をしたことになっている。

同工業会加盟の機械メーカー、商品メーカーなどを対象に調べたもので、両替機やコインテレビ、パーキングメーターなどの自動サービス機を含んだ自動販売機の普及台数は、昭和52年末現在で、339万1,280台となっている。自動販売機を機種別にみると、清涼飲料、牛乳、コーヒー、ビールなどの飲料が39.3%、自動サービス機28.2%、カミソリ、くつ下や新聞、雑誌、日用品雑貨などの販売機が18.0となっており、飲料販売機の伸びが顕著となっている。

昭和52年の1年間、自動販売機で売った商品、サービスの総売上は、1兆9,801億1,608万円である。売り上げでは、切符(40.7%)、飲料(33.3%)、たばこ(11.7)が多い方で、これだけで総売上の86.0%を占めている。

このような自動販売機の普及が、生活構造が複雑化した現代人の社会生活に、いろいろな便宜を与えたことは否定できない。閉店後でも、深夜でも、熱いコーヒーや熱燗の酒などが買える場所もでてきた。これからも各種自動販売機の増加は続くものと思われる。

「地下鉄の電車はどこから入れたか」の万才で人気者となった春日三球・照代の最近のネタは、自動販売機である。

「将来は、花嫁も好みに応じて自動販売機で買えるようになる」というような話で寄席の客が笑っている。もちろん、そんな機械が製作されるはずはないのだが、このような話で、笑いを誘うことができるのは、今後もお多くの人々が感じているからだろう。

このように、自動販売機は、人間の社会生活のなかで多くの役割をもつこととなったが、反面そこには、広大な社会のなかで強制的に画一化され、消費・余暇生活においても標準化された現代社会生活の一断面がみられるような気がする。機械が相手では、価格を割引いてもらうこともできないし、店員とあれこれ相談のうえ商品を買うなどというショッピングの楽しさも減少される。店員がいるのに、自動販売機で食券を買わなければならない食堂もでてきたが、そこでは望まなければ店員との会話は必要ない。昔の歌にあるような、たばこ屋の看板娘に会いたくて、毎日たばこを買に行ったというような人間らしい行為の場も、現代では狭くならざるを得ない。

機械が故障する心配も全くなかったわけではない。正しくお金を入れたのに、品物が出なかったり、つり銭が不足していたりする例もないわけではないし、特に、千円札を使う時などは、大きさに言えば、一種の緊張感を伴なうことが多いものである。

硬貨を入れて好きな音楽を聞くジューク・ボックスも自動販売機の一つであるが、今は、むしろ誰でも手軽に歌える「カラオケ」の方が大変なブームを呼んでいる。これには、いろいろな要因があるだろうが、一つには、機械的、一方的大衆販売にあきたらない人々が、人間本来の特徴である自発性、創造性の発揮の場を求めようとしている心理に基づくところが多い……などというのは考え過ぎだろうか？

ともあれ、自動販売機が、現代人の社会生活に密着してしまったことは、疑いのない事実であろう。

(資料：時局ダイジェスト1978・4月号)

(消費統計 高野)

草野球必勝法 …………… その3

— 相手の実力をためす力をつけよ —

野球の実力の違いは、当然のことながら、打力と守備力の差というだろう。でも草野球では、その日の調子によってその実力の振幅が大きいものだ。結論を言えば、勝敗は試合を終わって見なければわからないということだろう。

「草野球必勝法」も今回で3回目、少し力がついたところで、相手チームの実力を試す駆け引きを覚えておこう。

けん制球の投げ方で判る実力

ランナーで塁上にいる時には、出来るだけ大きなリードを取ることは誰でも知っている。ところがピッチャーのけん制球についての知識が足りないばかりに、無残にもアウトということがよくある。この場合はランナーよりもピッチャーの方が上手ということだ。

ところが、草野球では、どこのチームのピッチャーもけん制が上手でルールに精通しているとは限らない。それにルールを知っていても、トツさの場合身体が覚えてなければ役には立たない。

では例によって、注意すべき点を例題で確認しながら話を進めよう。

問 ランナー一塁、左ピッチャーがセットポジションから自由な足を振って投手板の後縁を越えたが一塁へ送球した。ボークになるだろうか。

答 ボークとなる。自由な足が投手板の後縁を越えれば、二塁へ送球するとき以外は当然打者に投球しなければならない。このことは比較的よく知られている。

投手板に触れている投手が、投手板に触れたままで、けん制球を投げる場合は、自由な足を直接その塁の方へ踏み出すことが要求されている。しかし、送球することは要求されていない。(一塁へのけん制だけは例外)

問 ランナー一・三塁のとき、ピッチャーが三塁へ踏み出して、三塁ランナーを塁にもどすために送球するとみせかけただけで送球せず、引きつづき一塁へ振り向き踏み出して送球した。ボークとなるか。

答 ボークではない。

偽投は頭を使って用いよ

こういうけん制球には、実はよく引っかかってしまう。小生も一度やられた。一塁ランナーは充分気を付けなければならない。ピッチャーの方からみれば、有効なけん制球

なので是非ためしてみるとよい。

ただし、この場合気をつけなければならないのは、三塁への偽投は、必ず足だけ踏みだせばよいということではない。最初に踏み出した塁(一塁を除く)走者を、塁に戻すに足る明らかな投げるまねをしたか、しなかったかによって、ボークか否かを判定されるからだ。

これまで読んできた諸君は、けん制球にはよもや引っかかることはないと思うが、次のケースではどうしたらよいだろうか。自分がピッチャーだったらどうするか、充分検討してもらいたい。又、審判員だったら。

問 ピッチャーがセットポジションから一塁を見たとき、一塁ランナーは二盗を図った。ピッチャーは投手板に触れたままぐるりと回って二塁へ送球した。ランナーは途中から素早く一塁へ戻った。攻撃側から、ランナーのいない塁への送球はボークではないかと抗議があったが、どう判定したらよいか。

答 ボークではない。

ただし、ピッチャーとして気を付けなければならないのは、二塁への盗塁を防ぐ目的で、第1動作で二塁の方向に正しく自由な足を踏みだすか、投手板を正規にはずして送球することが必要だ。投手板に触れたままのけん制では、一塁へ踏み出したのを中止して二塁へ送球するとボークとなる。

ここがキチンと出来ればピッチャーのけん制は上出来だろう。うまいランナーにはボークをさそわれる。要注意。要注意。諸君の健闘を祈る。では今回はこれまで。

(行政資料室 高野)

